



● 兵士・庶民の戦争資料館・館長の武富智子さん
(鞍手郡小竹町)

武富登巳男氏が開いた戦争資料館

私が、夫の武富登巳男と結婚したのは、終戦まもない頃でした。その後、激動の時代を必死に生きてきました。そして、夫が還暦(60歳)を迎えた日、「還暦のお祝いでもしようか?」との私の問いかけに、夫からは「いや、祝いはいい。ただ、これから、戦争の資料館を作ろうと思う。戦争で多くの仲間が死んでいったが、俺はこうして生きている。これからは、あの戦争の事を伝えて生きていく。二度と戦争を繰り返さないために。」と返ってきました。

それから自宅の

一部に兵士の遺品や戦争にまつわる資料を集め、戦争を語り継ぎ、恒久平和を願う場として、一九七九年(昭和五十四年)に「兵士・庶民の戦争資料館」を開きました。

夫はいつも言っていました。「遺品が遺品を呼ぶ」「戦争体験者がいなくなっても、遺品が語ってくれる。」と遺品を集める理由を。

遺品が遺品を呼び 遺品が語る。

戦争を体験した軍人も、民間人もやがてはすべて姿を消す。その後で戦争を物語るのにはモノである。これらのモノには、戦時下の人々の苦しみが深くこもり、一つ一つが怒り、悲しみを伝える。全く戦争を知らない世代や、子どもたちもこれらのモノに手を触れて、その手ざわり、重さ、堅さなどを実感することで平和への意志を固めて欲しい。

(兵士・庶民の戦争資料館、設立趣旨より抜粋)

